一秀堂

幸月庵

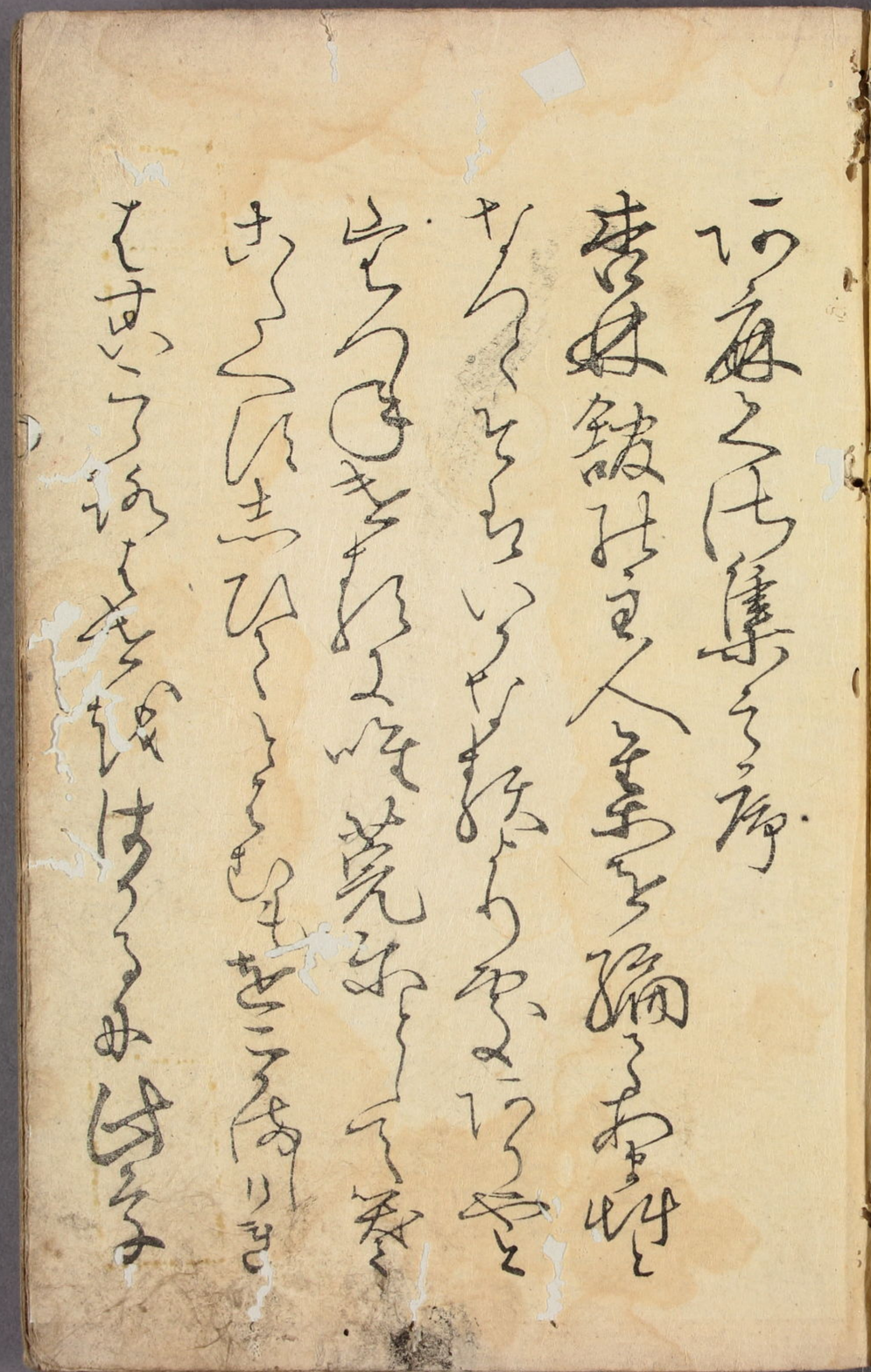
甘艸集

幻亞校

安政 戊午刻

彫刻 前橋厄原

宮城文庫



よく先祖をうやまひき君臣
補佐のみちをおこたらずしてよし
主人に仕へ父母の恩を思ふ事なり
撰者依怙に仁の御徳を表して裏に風俗
をまもるる人は何徳あり孝道
平穏をいやまひつゝやすらひさし

うやまひを受けまたと教へ
請ひと時何程をたゞしくまく
おろそかにあらむよめ夫りて居事へ
第一すゑ經て學問は政をとぶ
つとめもちて礼によい平の敬
子ならぬ人ぞ才ある老者を崇むべし

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

我ゝ[illegible]

自夜くゝ手次[illegible]　幻亜

菊[illegible]の枯葉[illegible]　徳丸

四方丁[illegible]　可交

裏関[illegible]一人[illegible]　琴岱

日[illegible]　桃涯

亜

四風来鳥の雉

立こいのも別す忘まて袂さき　交

夫婦なら手恥きらひし　蝶睡

福昼ら六ツ森中るぬ状便　光淑

植るゝ春先紫初手ら芋取　亜

山のゝ亭はすり伯風ゆり取梨　卜園

藤覚ゝ手試る福　涯

葬の三味まいらく札つけ亭　丸

急ゝ見ゝこうる作ゝし取の月　亜

是の中至漾應

峰むくの喰ゝゝみあらぬ油残　睡

いもぬゝも取き法袋の事　園

手近くの花も石つゝ咲ゝ里　士云

火ゝ子病比ちやるきさら春　丸

足も寸鼓やゝみ郷を貴歩り　杼子

鳴て君のゆるのゝ入お　岱

針眼ゝ朝見ておゝ伯も目のつ逢　亜

男ゝ嘆ゝ取久女ゝも比なる　壺國

人ゝは極き遠く撞木町　丸
叔父ゝ長崎より帰る性の冥蛍　洲
移さしゝる葱の嘆き止ぬ心　聖兵
立場あてゝゝ出いぬゝる　交
年比の鶏ゝ鳴く鶏下来里　岐屋
銭一貫七百文　芙氏　丸
各月の彩色面々数里を奉し　國
戸あゝ変よ指ふ杨の実　云

楚々ある山の姿　丸
一人二人ゝ越さぬ川の淵　屋
狐さしの出るゝ高山の葬式の森　亜
門徒ゝ宗ゝ乗形下社家　丸
雲の木ゝ育て種子押形ゝ比　信
実厨荷ゝ来き際雲ゝ高ゝ　茅

茅屋

白雨

白雨の降りて後の時雨かな

元和

如来の御像に供へ奉る

元和

雪の餅は形ばかりの魚を後造て

亜

雪にまぎれぬ雲のなりそこなひ

和

夕月をかすめ柿の木猿来て

亜

引人も見ぬ淋しかりつる久

和

世事詩教辱諄〻一去道山三換春清坐
疲行探句夕雨吟風嘯賞花晨空餘林下
青苔塔不見園中烏角巾當日羊求来迚
徑只存松菊寂無人

右

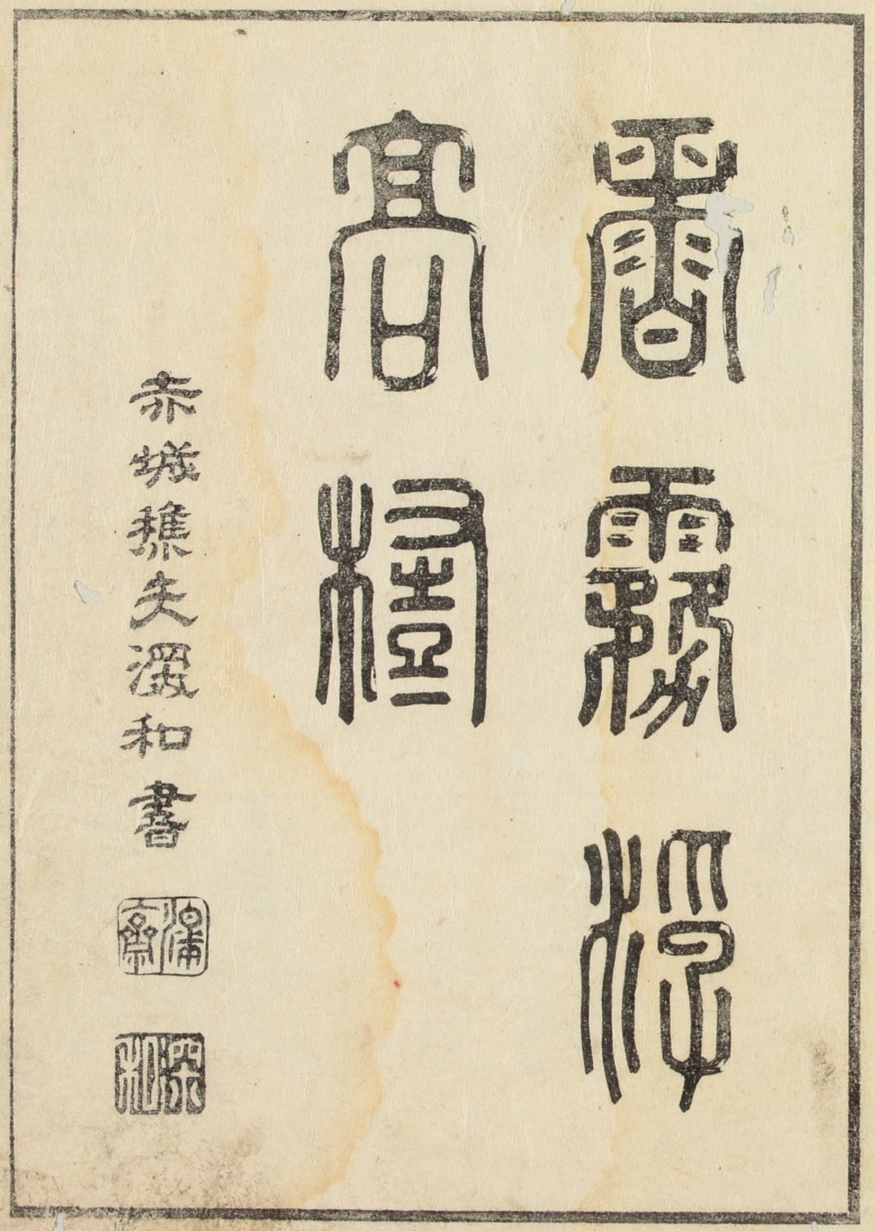
過竹渓上人舊居

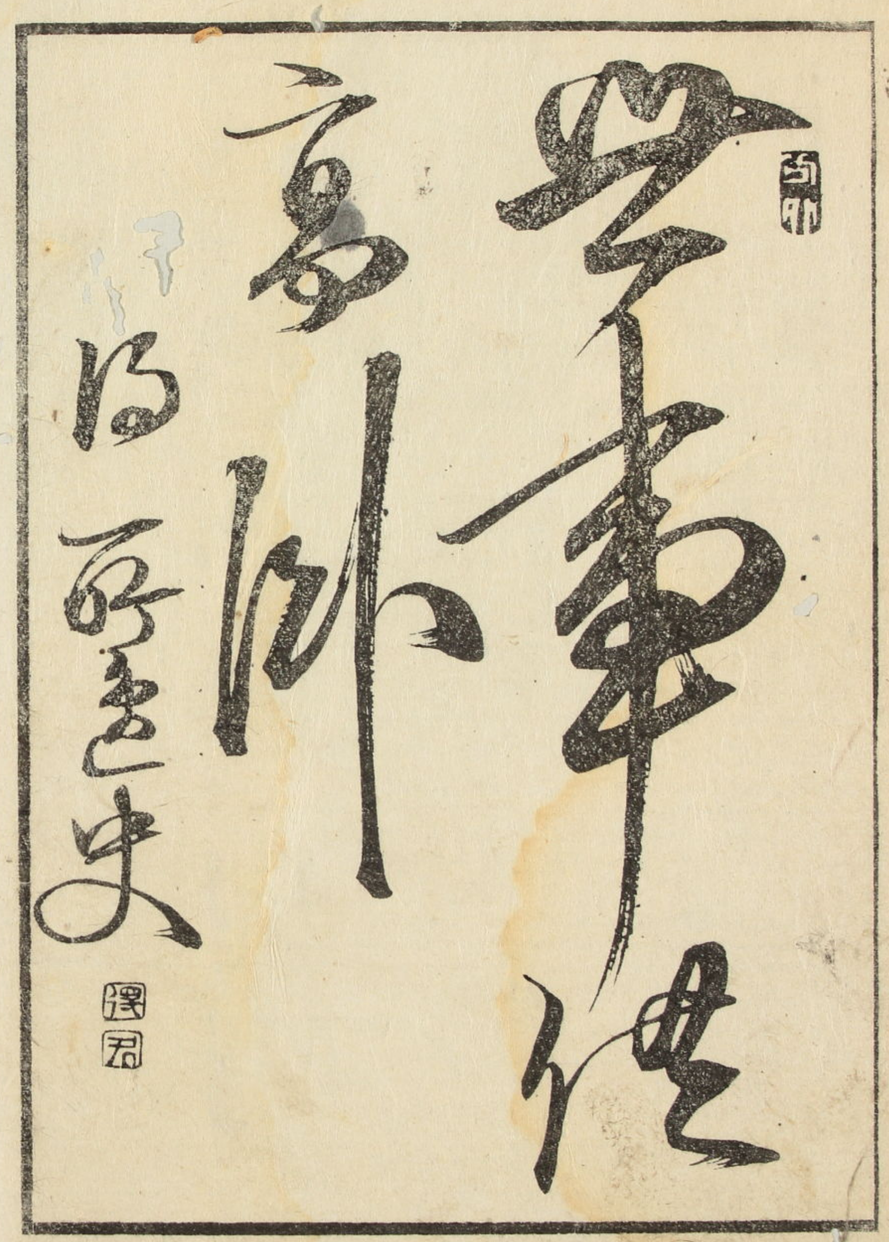
堀口貞歓草

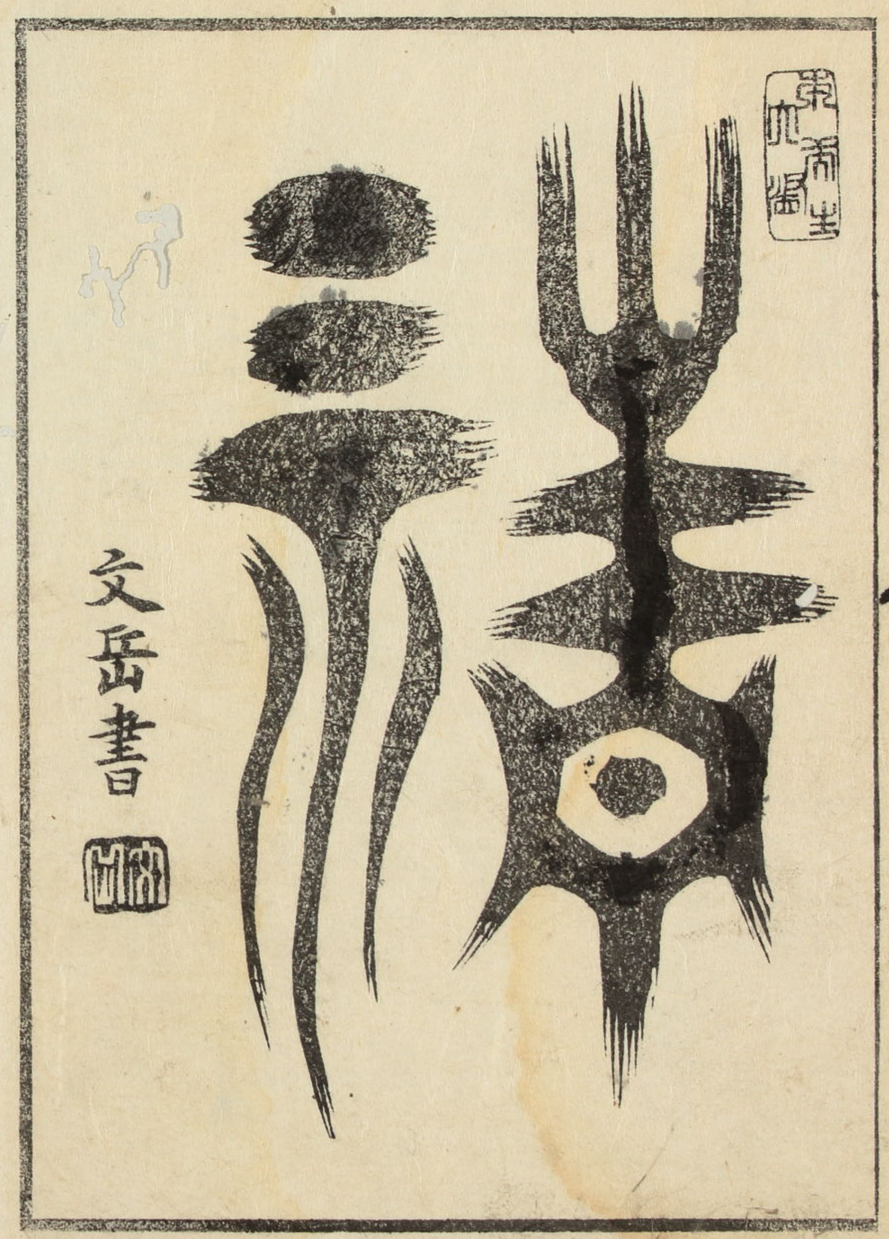
大やまと　あもつ塔　久紅
国作る　春日の霞
神の代ゆ　なつかしき

我学窓　天樹

寫得
洞庭之景
峰巒之奇
南濤


雷霆
雷霆
赤城樵夫澀和書



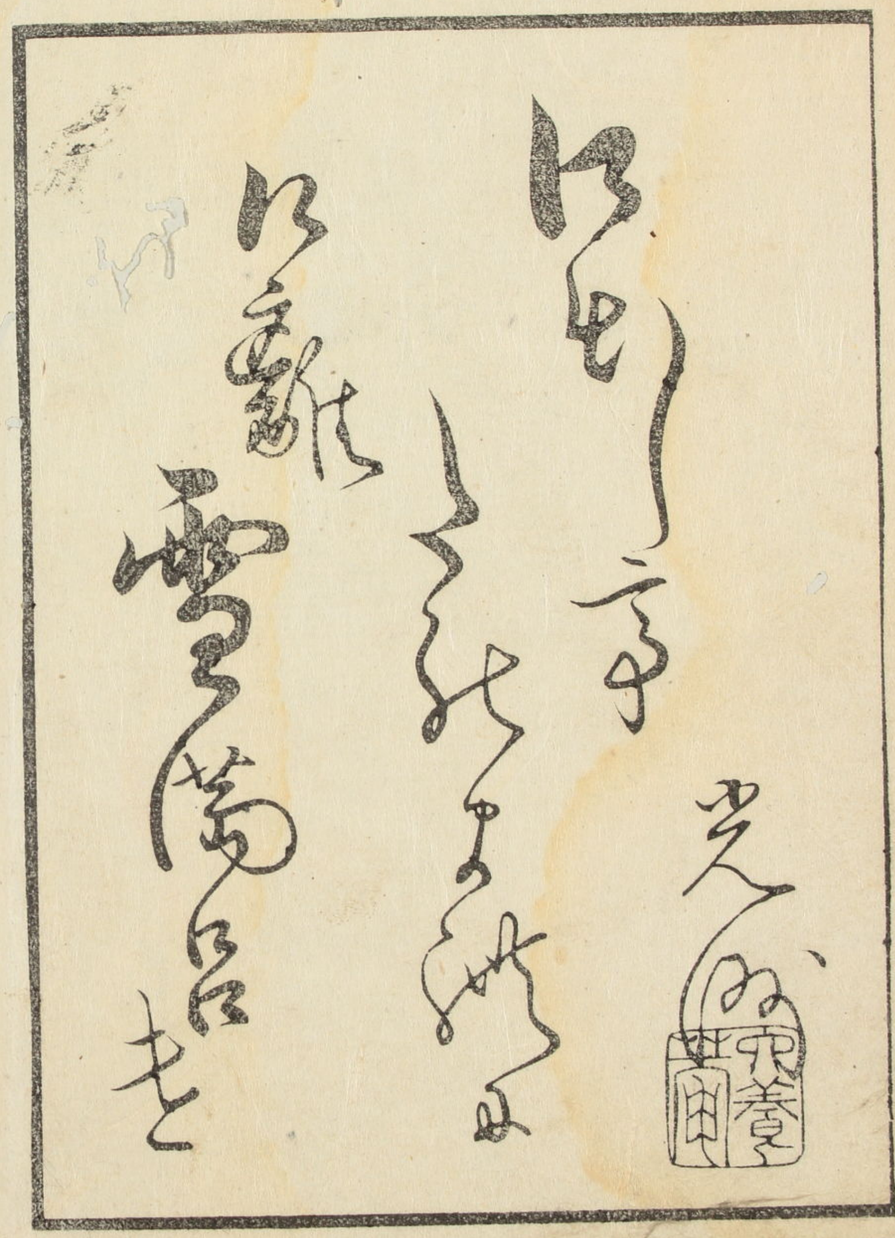


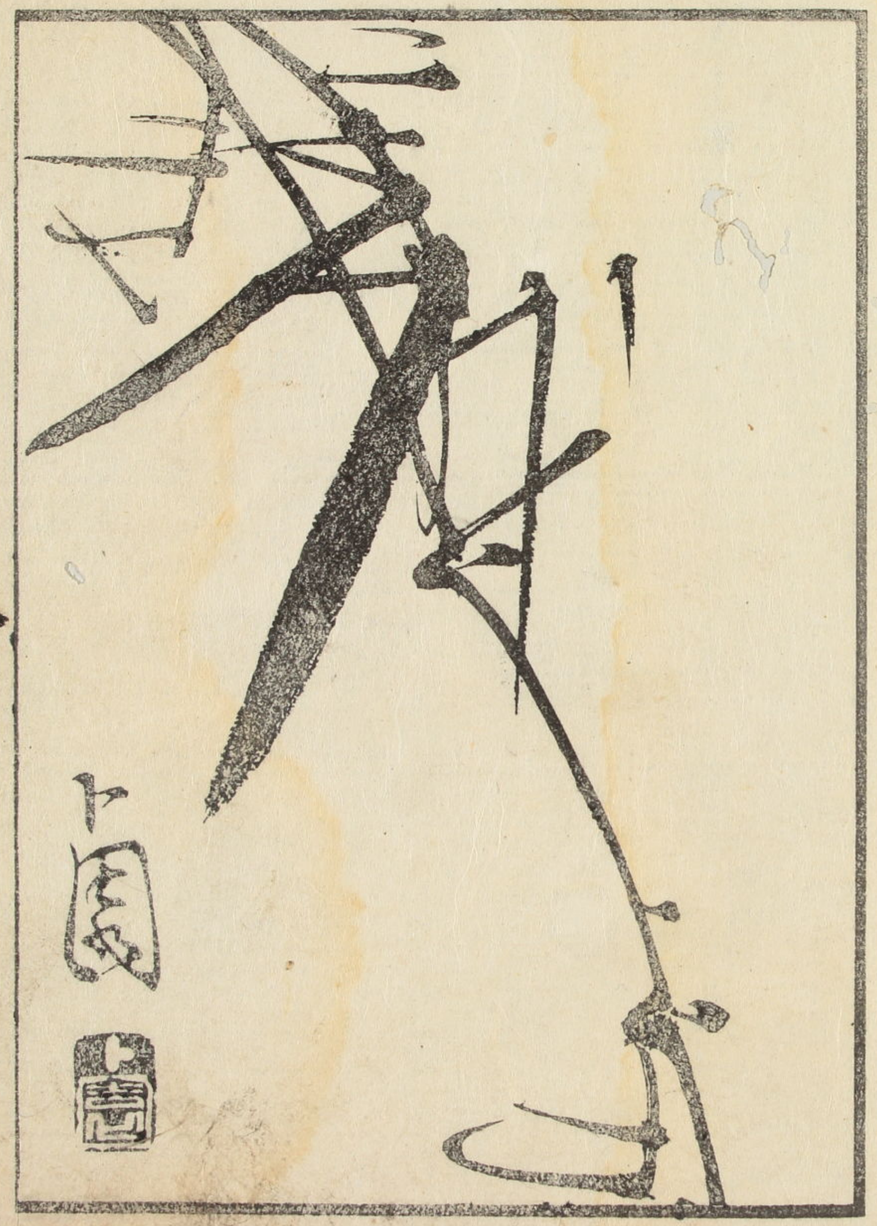
文岳書

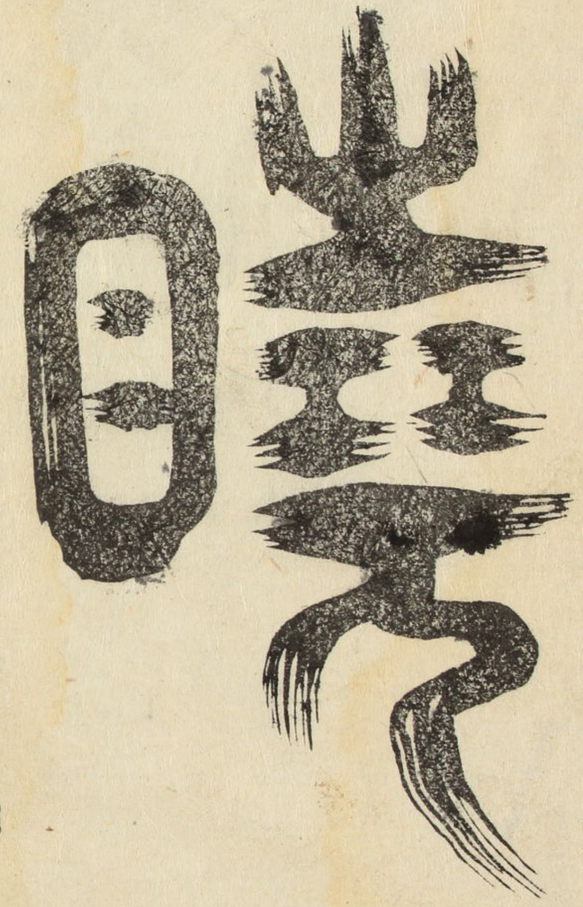
此地有崇山峻嶺茂林脩竹又有清流激湍映帶左右引以為流觴曲水列坐其次雖無絲竹管絃之盛一觴一詠亦足以暢叙幽情

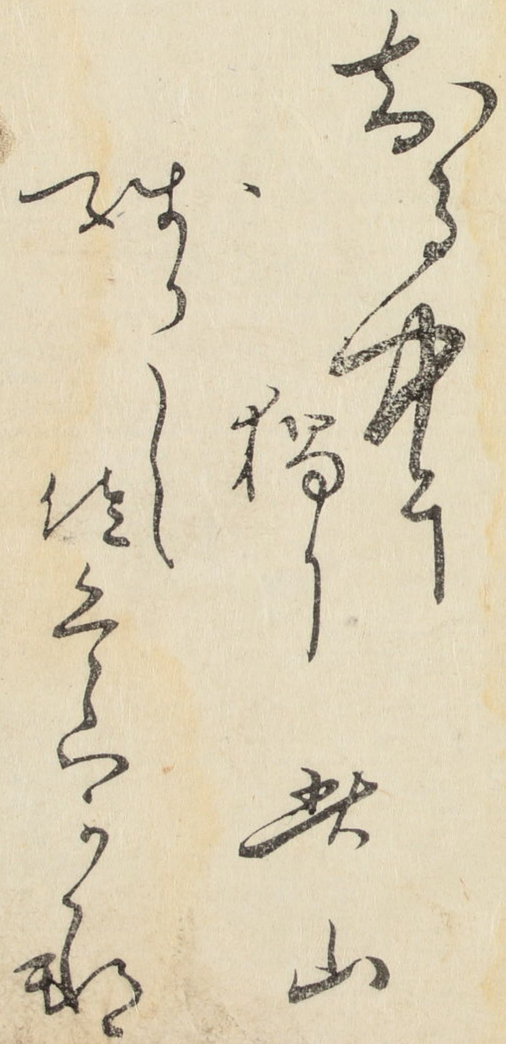
戊午孟秋

廉齋老漁

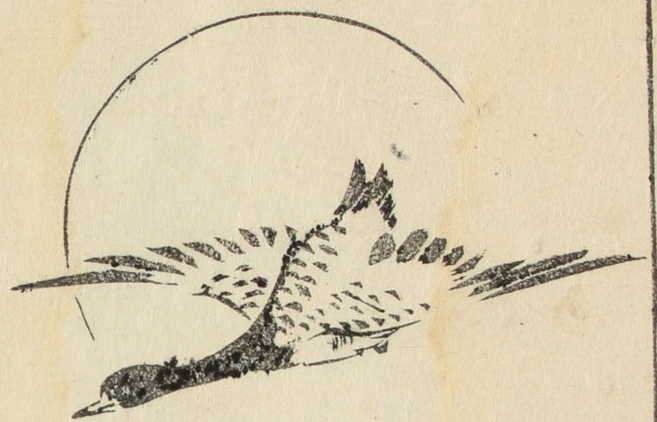






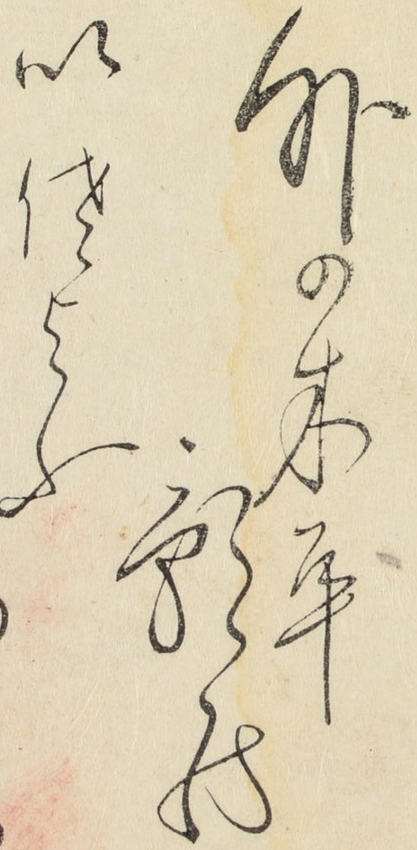


下毛小友　小林来之吉



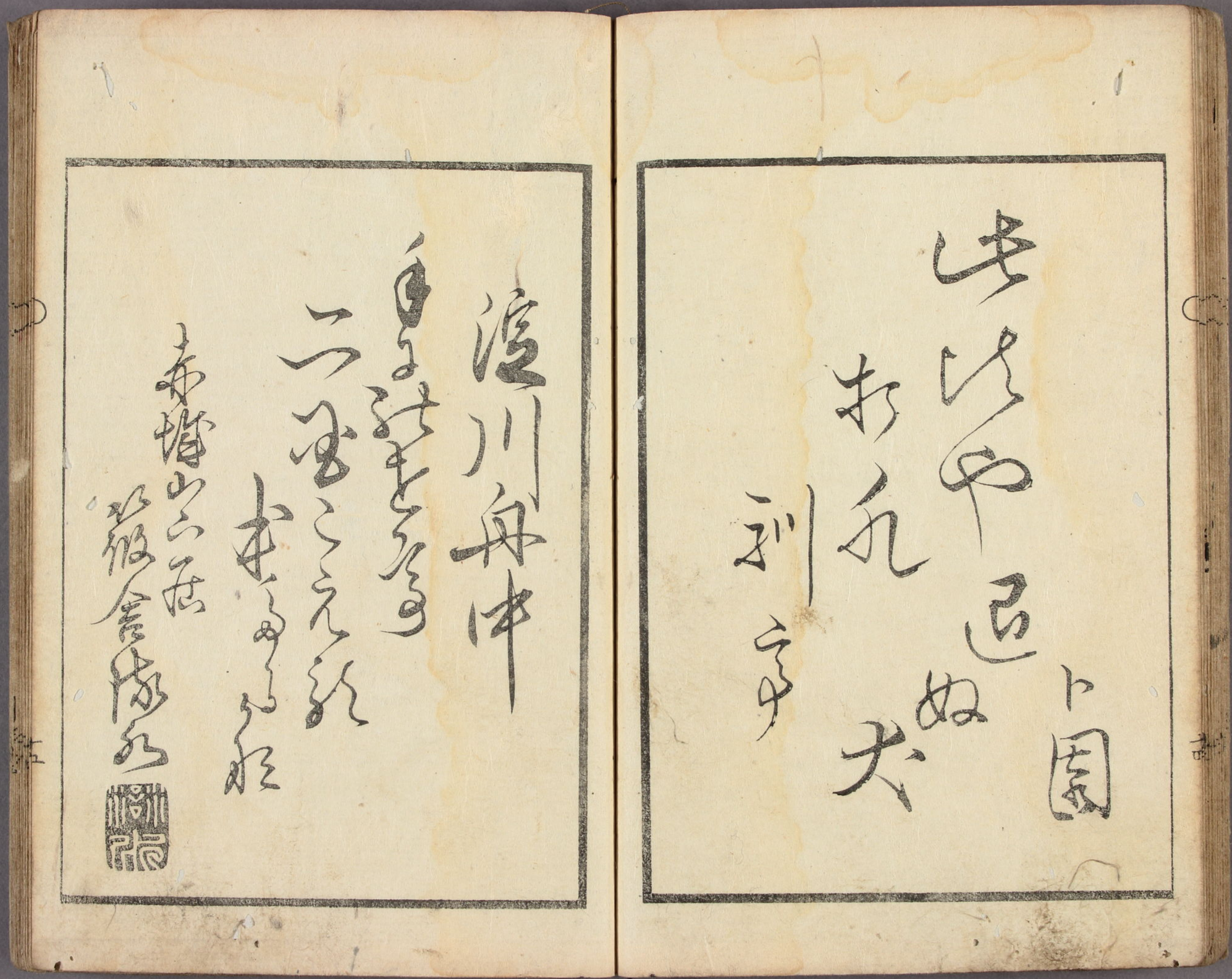
第八
うき立かな
秋の月

一茶



去年の月
部屋に
はいりこむ
樹の影
清風

一橋侍子等
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]



鳴神もいつそ
照てふらぬ雨
毛和

嚔乃庵いてちるや松の葉
まくら濡待居ておもひ草
瞬をさそて見なくぬ旅ゐ
延帆よおさ舞とはよ鳴るらし
大四季庵　蝶睡

春風送り鳥声和竹枝
花笑て聞河鳴皐禽
月色照海落蒼茫

春山亭楼
青郊題

あ哉やいつみ
すしき
もみぢかな字

葉ゝ吉

丘園

いしかわ
ゑもん
おきなり

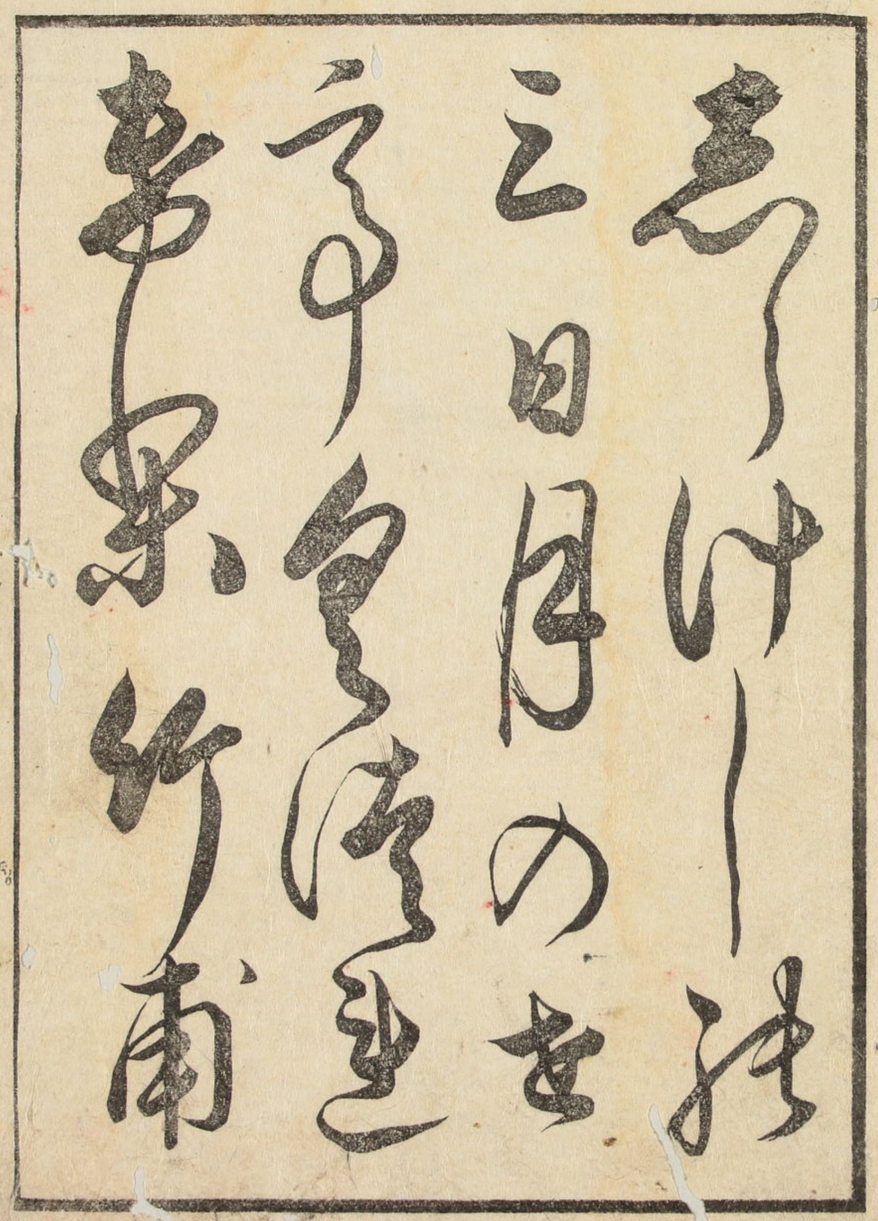
國語

為生存
彰明
較著
野蠻
性質

岐阜
峰屋

相吟
雲雖
限不
雲溪
醉里
林
齋

東泉


三日月の女
竹南

東海を
遊久子ちかくまゝ
こゝにて
ゆたを
ゆ春を
ちく久海園
英 士奏 酉 壽

信濃名代
唐木品隆

柳間春
枝の
柳の
有春花
春
春を
ゆ
ゆ

朝隨樵者去
暮伴漁翁歸

為球五津一湾

人のこゝろまことの心さこの郷　ムサシ

逸淵
石渡
茂三
秋畑
一麿
空樵
三人

活計平沼や机の先乃人はさて
暗うもあり明るくもあり鳴子
人を見る鬼は重なる廉の子の形
時百万年伏見の宿乃屋根籠
流れ藻の流れ為りて咲はゝ雑
人見て言る斯見て言霊

ある中の夜寒をしのく鑵子哉　西馬　下ト　十四

淋しさや影にあまりし雲の衣　貫乎

名月やさはらぬ虫の灯によられ　斗米

野も山も花や思はるゝ冬の梅　青郊

絃清しゝやいく日をたはの岩中　三十又　萩鶴

海棠に熟る眠寒の覚に乃梨　下ツケ　未洋

花長久やむきむすめしてあちらむ哉　浮山

照りあう秋の余ある更更に月夜哉　其笑

田を出て入りかゝる沓んの郷　上ツケ　心足

黄鳥に取りぬきの手入れ藪の竹　分尾

あらしや萎むとまた口をもち枝　良斗

起てよいけに勝手干　岩の音　竹烟

水を灰をかけて見事なる柳栄　米湖

西后月といつる影をきくかな

稲妻をてり消し月の光りその雨　菖洞

啼らぬる夜もむかし杜宇　米室

一朗　毎満　分家（キリウ）　一子　生雪　桃園　五代子　夢ヒロ　孝書

きりぎすの鳴る夜も寒し寒月の
冬ごもりあれ伽安こそ屋の縄
迄ぐ来るさきく形ゝて冥古雪
ねなぬる夜食と寒しぬ冬の月
莚戸を洩ぐ搗ぎの明り寒
鳴るゝ子の寒の重なる子雪ゝ
夕食やゝ上一日のたき暮り
あ重食の日ゝ寒初てきさい

白井　柏堂　可交　梅竹　宇英　梅雪　東英　文竹　新甫

きさい秋る月ゝ見寒柳ゝ郷
汁講れ二夜かくりや寒の西
松風の寒を根ゝしてきさゝ
夕寒れ様蟬見きてる五月寒
きさゝく枯ゝ世ゝ屋ゝ
竹寒二の寒ゝ形く杜宇
ひやつぶね不てれ寒鶯鶯寒
眺い眼の由久度ゝかきつゝ

ふこゝろをとゝまるを火ぶ

遠きより来山見しるさるもの　北モク　秀高

紫陽花の色々変れるの意　已白

用まる我燭まるの夏　ヨノコ　冨雪

永寿を長らぬつゝ長久の花　花蝶

秀句葉を形り接ゝ雪の山　柳笠

月の行るおいまかきらぬ秋の宵　暁雪

雪解や接穂かゝる陶化瑞　九才　泰嶋

幻如

従つ来つ雪の中に接る堅梅ぶ　一由

新年後の京かきるる柳の郷　松風

年を実を形りく咲や芝翫　村上　梅壺

秋葉の見るにあく暑さるもの　川ニヤ　柳子

京白行るや牡丹の芝乃宮　宿蒲　泉下

ある丈ら畑の水あり桃の花　吐一

新宮の社清秋の紅葉の形　又マタ　渭中

庭樹夏の木の蔭の蔭に接ぶ　壺國

山翁ならんの雁やなく　乃雄　玉人
鶴ぬや月はなれてある学まを　朝采
長閑さの限りや夜半の松乃影　釈　芳志
黄色を付係り形至義の　栗園
ならくと陳る花の山路の雪　秀桂
ちるも又おもしろしてれの春　隆雄
植ゑ松見るよりやおもしろ自　可駅
あきまくらを捨て花河菜山哉　松趣

ぬるむあ新くるる流れ乃春　一牛
家都る見捨て園屋の栖れ哉　桃岱
おく越す大帝入まる戸口菜　三恵
貴ゑ乗る魚の躍るやなら嵐　厩舎　古山
ぬまるのを葉ひゑ矣く飯を乃形　マヤハシ　南雄
りあれ誘ひ残しや学の家　芳山
ちるを落てもあ上ん鬼社至　営外
二階書信書法移ゑ乗り羽子の春　子麦

一トせまりたる形にして漁火とあるべきに
はるかにおきう形なる山の月夜にて
景色しいとおもしろくあるべきを
漁火の字を用ひしは心の秋
男山と咲らぬうちに社樹紅葉
見所なる空笑顔なる月夜の事
なり峠や手柴にて焚る炭竈
数の煙や菴をかすめる山の霧

園漁　笠曲　佐水　松海　甫川　袁耕　士云　桃涯

ある雪ちひるこの見るる生屋の事
こまやかさや冬籠をこの見る明り　コムロ
一すぢなる初雪なる山路の事　ニハラタ
本は迂なる峠なる引ける子　ニツロキ
おきなるし流きく垂なる柴夜の雪　モリ下
赤手柴なる力殘して塚乃売
物月にはまちくふしの見る里　り御
冬は柴とあ食和おさ　枯野集

窓外　留高　米海

四里ばかりつゞけるの路
夏草や蒼葉のおもて椿の友　弄学
雲とまがうてさゝしきすきぞ　可適
見そなはすしるの名高き秋の月　逸商
岩松門
笠衛
ナクモ
文雄
釈
一豊
笠坂
前山

夏草や二ね月
塚ぬきや春ゝ見ぬ門の石
哉ゝ山の海や先ゝも稲乃花

因もあさ姿清ゝもあり音杜宇　聖兵
如雷きゝ咲ゝ雁云ふかきつたゝ　かけ良
見るゝあたゝさ先ゝめゝ花　斗味め
高ゝ行るうちの見物やゝ〳〵の雪　幻亜
能知其自然
山梨ゝ一盃あり音酸ゝ苦し　倭丸